

會稽三浦御言
五

~ 13
3114
5



13
3114
5
卷

武子

武士道

カノッヤ 山

會社三浦譽卷之五

會社井



具足櫛

浪速

高木よそ



濱松氏助



水鏡 皇極經世一 皇極經世二 皇極經世三 皇極經世四 皇極經世五 皇極經世六 皇極經世七 皇極經世八 皇極經世九 皇極經世十 皇極經世十一 皇極經世十二 皇極經世十三 皇極經世十四 皇極經世十五 皇極經世十六 皇極經世十七 皇極經世十八 皇極經世十九 皇極經世二十 皇極經世二十一 皇極經世二十二 皇極經世二十三 皇極經世二十四 皇極經世二十五 皇極經世二十六 皇極經世二十七 皇極經世二十八 皇極經世二十九 皇極經世三十 皇極經世三十一 皇極經世三十二 皇極經世三十三 皇極經世三十四 皇極經世三十五 皇極經世三十六 皇極經世三十七 皇極經世三十八 皇極經世三十九 皇極經世四十 皇極經世四十一 皇極經世四十二 皇極經世四十三 皇極經世四十四 皇極經世四十五 皇極經世四十六 皇極經世四十七 皇極經世四十八 皇極經世四十九 皇極經世五十 皇極經世五十一 皇極經世五十二 皇極經世五十三 皇極經世五十四 皇極經世五十五 皇極經世五十六 皇極經世五十七 皇極經世五十八 皇極經世五十九 皇極經世六十 皇極經世六十一 皇極經世六十二 皇極經世六十三 皇極經世六十四 皇極經世六十五 皇極經世六十六 皇極經世六十七 皇極經世六十八 皇極經世六十九 皇極經世七十 皇極經世七十一 皇極經世七十二 皇極經世七十三 皇極經世七十四 皇極經世七十五 皇極經世七十六 皇極經世七十七 皇極經世七十八 皇極經世七十九 皇極經世八十 皇極經世八十一 皇極經世八十二 皇極經世八十三 皇極經世八十四 皇極經世八十五 皇極經世八十六 皇極經世八十七 皇極經世八十八 皇極經世八十九 皇極經世九十 皇極經世九十一 皇極經世九十二 皇極經世九十三 皇極經世九十四 皇極經世九十五 皇極經世九十六 皇極經世九十七 皇極經世九十八 皇極經世九十九 皇極經世一百

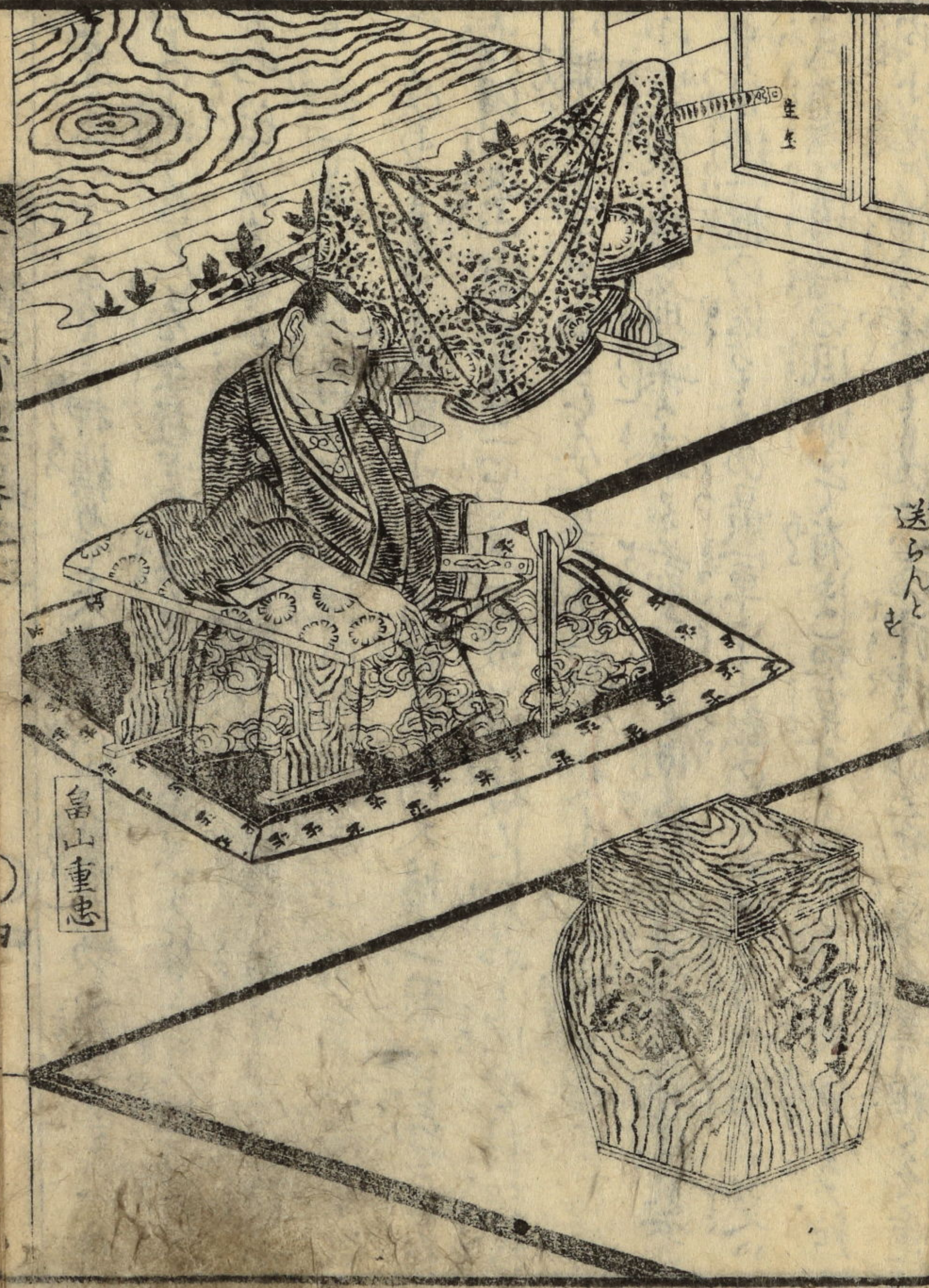
三浦譽卷之五

御名代おりきさるうらお大御礼とちわく小相迷まら重忠も
威美を繕ひ其方も存此如く近く出陣つた立出に物小結
四五日餘りも奥もいづ後王房が容跡氣づけ病氣強くも
らとち尋ねよお大畏まる此頃へ随分お静めて口とわく
寐らる勝るうら御氣は越つとち出陣の御評美小云きさる
女の長居おさるまわると立んとちあなを重忠哲と叫ぶ幸
ひ其方へ付お役目あつと封付の文箱取出今度重忠が討
手小むら子衣竹立の城小楯ありふ三浦の大助美明敵味方と
まうれも玉房が為あ現在の祖父吾らう孫輩の武士
の意地が表向た一家のまじも黙がく朔日の言祝うこ籠
城見廻の送りりの目出わ為小女の使者委細の口上外一通小

あつらぬ墨原来志のひの使ひるまび支度小おまら早
らまと仰を清け有難に殿の御詞御家門多き其の中ふも三
浦白山とちて六世上の鑑とちあへま程の睦は死御一家とち
時節いふ中るうら敵の味方のとちうまいつの頃るう音信不
通とちるう氣の毒さるま支うかとちわくお大が尾を喰てまら
いとく女の癖せ心小欲き居たじし其御心をうけぬる有
難ともさんや冥加のちやさんや人おあまふ私を御使ひ
承はしと悦ひ勇む詞のうら奥書院より立出あ當家の執権
半沢六郎成清主人の仰も重じ死鑑榭昇らうを垂て作付
らまたらふ三浦どのの音物漸くとち今相とちのひと目とち小
ま重忠が物好とちて六ヶ鋪あつ人物早速小出末一殿く

汝がもつらぬ其上ハ見分おも及ば急に衣笠の城へおつし
 随分密小持参せよと詞の間の唐紙押明も近習の取次
 重忠のまへ小頭をさけ大場三郎景親との城攻の美かつた
 對面の支あつて御来陰ひと口上具さ小白砂の庭をや入
 大場が押柄重忠が屋上ふるまひ六郎を始々近習の武士
 威美を正さふ座席の礼美も大も兎角立ちくま一差つとも
 めて敬いのま重忠大場小打向ひ珍じき景親殿召寄らふ
 へま物さるゝ重忠御部へ参らん小御苦勞の御来駕城せめの
 美おつに對談との御支六波羅の御下知あるん子細い
 小と尋ねる小を先達て京教の下知搦手の大将小梶原平三
 景時連手の攻御自分と申渡せば三日以前梶原年輩分

相應の役柄御辺いもさる事變立居事軍の身かには結構とた
 討手の役目大夢と思つて取物も取交と出陣を急ぐま
 苦るふ小左はくして遅滞るも夏能と案を廻らる小御思
 敵三浦大助孫智るね二心小遠ひは去ふつて此後目々
 某も屏侯野の五郎景久小持替やま入所存るゝ其旨心得
 と云せも早ぬ小六郎成清景親の前小はつと出大場さゆ
 忽の御一言縁者おもせよ親子おもせよ源平と別り攻戦
 小武士の身の久古来るる例に其道理を弁て六波羅と
 のらるの御下知ある小私の料簡小二心あるん主人重忠
 見遠へての御下知ある返答小つて大場とのそ対場は世何
 くと詰寄るゝ重忠駢々も六郎とつた白眼某を指おたへ



富山重忠



半沢六郎

存心なる
重忠謀つて
鑑櫃を
よろひつ

衣笠城を
きねかき
送らんと
す

あし

せよふ一言の事と押鎮めて大場小向ひ某大助小縁ありて
 この御うたうしを至極せり去りて此重忠小うにりて先様
 うつひてひをまを心を要ふは明ら後日、出陣と梶原平三吉時
 中合してひ、退付目出度凱陣の圍を御耳小入中、せんせも氣
 つうひあをきふと武勇小縁らひ繕ひ河大場、二圍合とせねら
 左側と比ふ重忠を二心と見定め、被校に有やと向かひ被校
 眼前は小あつととんと立て未座小扣、か犬を引立重忠の傍
 小突飛、最前某が来ふ即ちと向、城中へ見廻ひの使、此女
 中付、鎧櫓の送りの最軍中小敵のうと、酒肴を送る、其は
 武道の情時の風流、さて有は、た更るうと、未く矢合もた
 内小忍ひ使の送りの二心の被校といふをも、果は其箱こそ重
 忠が誠をあらうき送る物、鎧甲ひつう、及びと小手脚當ふ、
 置たると、疎忽たやう心を付て、能見らまると、河小は、た
 苦小せん大場が、手先の力益、こも放せ、鼻の、たぬつと、出
 大振袖、重忠が、国の花、たふ玉房が、玉の黒髪、緒とも、小乱る心志
 とけし大場、怖るると、お犬も驚く胸の不審、鳥活小様子を、同
 と、まきもせひ小首かむけ、案じけふ

○物狂い

重忠真中小押直、御覽の、おと乱氣の妻女を、具足、被校小
 置る、其某が胸中小二心、た言、大場、どの、勿論、お犬と、も合点、ゆ
 は、此増子細を、語つ、向せん、是あふ女と、重忠、親、の、幼、話、小
 て、知、少、く、の、言、名、付、り、あ、ふ、過、去、の、業、病、や、らん、皆、礼、の、其、夜

しく心狂氣あるか一門一家驚た集まる様之醫療せん
 せとも更小其駭は鬼のて一旦弓取の妻と定め玉房を病
 うるごとく離別もあつひ今月今日只今まで彼が乱氣を相隠し
 一生重忠が宿の妻透ひ透んおれい小今度三浦の大助を攻
 け討手の役重忠武運はほして大助を討まらぬ妻女の縁小
 引さして心腹せざるんぞ死後の人口ら惜く又打勝し重忠を
 罵を討不骨の武士仁愛の國たふとみせざるんハ必定所詮
 一旦の美理を捨他人小まつて軍せむ小懸ふ吉もほは速小難
 別せん胸は変着あつても何ものても乱心も大小此旨を渡せ
 養ひ姫二世の取とてよも一應心得心せほと是あふ六郎小心
 を合せ欺くまじして箱入の進物三浦のうへ心ざしとあぬま

いひつるも姫を飯さん為とるる書通といひは文姫の去状
 乳人のお天が手小渡とてハ三浦小縁多た島山何を以て二心ま
 ね上小も言分有やと詞の威も振ひよ六具あつても程の箱せう
 標を津波の鸚鵡はし大場物物い鳥るて一言あぬ鷓のし
 翹髭たふ不首尾とよ大ハ胸小胸とるる借ハ臨の御座りや
 文箱ひもきて涙さうる三行半の筆立小御縁の切あも使も
 知つても大の浅さう小一杯冷やう糟悦ひ胸欲あふ殿は恨
 むあも恨まきぬ道理玉極の御身のう人玉房は成成り御
 説言もさふあ何病の出し端も美理小迫つ美理の
 美理が世界小る世あ何おらん伏轉ひ主のうも身を
 う小悔と然くてもあまらる大場も流石手持るく然在あ

て中谷よも若輩の御辺小もけきを解んと根が熟切小存も
 心かろふ心をに見届安堵せうふ去來皈らんと立んとするを
 重忠隔て妻女が此家を出ね肉小貴殿を飯と其胸濟と今
 暫らと押とめ今更歎ひて返るな古此う人の弥密小三浦へ姫を
 同道せよ輿乗りのといふも騒じ矢張此具足箱人の不審もある
 まじりと早く行と苛立ちま是非も泣く心体多た玉房御察をた
 き起しう小心り堅りるまはと夫婦の御縁の切まるも知ると大
 体世間の婦女はつと思ひて氣を遠う下地ううの気のちうひま
 と思ひて本性小うまをまむ情さや去といふの身へ入らぬうま
 穢まよと恥あむまと其甲斐とて涙の種畠山も半沢とてるを
 察とるあく目元暫し詞もかろじう重忠能といふるを催く未練

の操言時刻移まら大場との差當つての不調法早く
 沃と色荒く鋪呵らきて身と何れも小立いつふ下都月
 武器箱も今の夏身玉手箱明て悔た玉房御察好持の
 別ま煩腦のお大うる音甲斐もた三浦の節へいき行

○名残の酒宴

夜も長月の行秋の空の氣色も常よりいと騒じき雲の端
 交竹立の城小揃篋子三浦の大助多明平家の多勢をう受て
 討死の時節五來と先のさいし身の悦ひ頭の雪は百六の花と
 積じ長寿もいつのまの借物とて本来空の本丸小浮世を
 名残の酒宴の奥座席は名小地三浦の二門誰小遠慮も媚
 け子女房達のさうのまき支さる小軍の半とも目か見えぬと掛

ハ外面小ひく鯨波秋の風と冷まじ女中多き其中心も
 田の太郎美盛の奥方長竹御前良人小おとより健氣の
 質満座の中を這いよて只今同一鯨の志に極めて味方の
 敗北と推量小遠ひ有ほし申も討死と極めし人の敵のう
 とした安閑と閑て居人も益去来一同小切て出寄手の大
 將畠山の重忠小一泡ふるむいんと進むも流石武家育ち引
 當美盛の奥方打ちまのたたく畠山あもせと梶原あもせ
 鬼神あもあもさし同く武士と武士との出合男女の遠ひは
 あらとも男の方小縫があまは姫をせし揃があま驚破組合
 の勝負小おより敵小降参さささとも此方ふるは貞貞小後
 見せしと其小力を付らさる有合女中も男もたれ稽す
 了と取捨て甲よ體と立駭く大助人を押あづり武士の妻や
 て我達か勇むころの道理もいも氣を鎮めてよく聞けよ
 度の城責小高名せんと思ひ別當美盛を初めして和田の小
 太郎美盛以下も此城を退きわ然あ小銘くの妻女を殘し
 某又此城小籠置兵備佐とのくの深き忠功總の勢あて
 安房上総へ落さるあやを聞しゆ一門残りも依殿の御身の
 守護小と大助が指揮を洩さぬ勇者の常妻子をたて親
 を忘る頼母の孫子とも三浦の名字を末代小輝さん為
 あらとも夫小何そや大助が生過と此命も惜氣小女を
 敵を防ぎとるんが末世の嘲と面目さあも尋常小此城
 を攻破ふる畢竟の高名汝申也其通打物常と

あらとも夫小何そや大助が生過と此命も惜氣小女を
 敵を防ぎとるんが末世の嘲と面目さあも尋常小此城
 を攻破ふる畢竟の高名汝申也其通打物常と



會書三洲集卷之五

とくも武具せの曲又うらん化粧の女の乳美うらん髪うらん
 ひて絡く手配の持口を定め然敵小出入る漢討死せ
 よ我も最期の曠は東一間小入て認めんうらん
 あく弓矢小馴たる古兵士老の骨組逞は比障子押明おく
 小ひるるる鋪小のるふ女中の口くあるひの丸三の丸中の陣を
 思ひくふ手配して身の討死をいそくと打混たる談今半
 次の間の唐紙を静小明て出来よ部の娘重忠うらん飯ん
 たる玉房御寮の介添女お大操手所訟顔悼つらうらん各
 様へお祈ぐひ申度あると思ひ込んるる規ひき美澄の内澄年
 がさ役小う取ていつ及ぬ軍の最中討死と思ひ定め今も
 知らぬ吾も小福ひひ何度ゆや大方の度うらん其方心の
 簡小任やよとあふを押し其討死小付て御縁ぐひ申玉房の
 御身の入現在大助様の孫御まう各様の列小洩き何を生
 て御面目も御座りよやう守はまて居るか私まで無念よ本意な
 り口をき口上ゆら申さるる愛が何も茂様の御情御家門の御
 好身玉房様も役目を仰付らま討死の御人数小差うて
 るへやま生く世の御厚恩対人の有へたりと御小詞をうらん勝
 何度そと思ひし珍らしき直を聞つるよ不祥の死物のをうら
 まと玉房御寮ハ狂人不断傍小付添へる其方もを遠ひ
 取処もる死沢るに直叶をぬく立て進と危度つらねと御押
 玉房様ハ乱心ても御名代の此おぬ難兵の首うらん
 ひて取まはは合叶をぬ瀬小討死の横合うらん具竹御寮

とくも武具せの曲又うらん化粧の女の乳美うらん髪うらん
 ひて絡く手配の持口を定め然敵小出入る漢討死せ
 よ我も最期の曠は東一間小入て認めんうらん
 あく弓矢小馴たる古兵士老の骨組逞は比障子押明おく
 小ひるるる鋪小のるふ女中の口くあるひの丸三の丸中の陣を
 思ひくふ手配して身の討死をいそくと打混たる談今半
 次の間の唐紙を静小明て出来よ部の娘重忠うらん飯ん
 たる玉房御寮の介添女お大操手所訟顔悼つらうらん各
 様へお祈ぐひ申度あると思ひ込んるる規ひき美澄の内澄年
 がさ役小う取ていつ及ぬ軍の最中討死と思ひ定め今も
 知らぬ吾も小福ひひ何度ゆや大方の度うらん其方心の
 簡小任やよとあふを押し其討死小付て御縁ぐひ申玉房の
 御身の入現在大助様の孫御まう各様の列小洩き何を生
 て御面目も御座りよやう守はまて居るか私まで無念よ本意な
 り口をき口上ゆら申さるる愛が何も茂様の御情御家門の御
 好身玉房様も役目を仰付らま討死の御人数小差うて
 るへやま生く世の御厚恩対人の有へたりと御小詞をうらん勝
 何度そと思ひし珍らしき直を聞つるよ不祥の死物のをうら
 まと玉房御寮ハ狂人不断傍小付添へる其方もを遠ひ
 取処もる死沢るに直叶をぬく立て進と危度つらねと御押
 玉房様ハ乱心ても御名代の此おぬ難兵の首うらん
 ひて取まはは合叶をぬ瀬小討死の横合うらん具竹御寮

おのねねかへ玉房御寮の名代お其方討死し何吉又最良
おう大将の名を借て敵をよぶせられた討死すと其例も多
まとも原其方何者譜代の乳人といふもあはれ重忠の録
玉房御寮小付らきたる渡りよみの小添女年を重祿で奉
致せよと名代お録の巻外と違はらましても臆せぬお大お情
るは号竹まはの御洞賤に我身の久く鬼もあま御一門多き其
中小号竹様の為少現在の小姑美理といひ世間といひ俱く小
御世話も有へき苦玉房さほが本性るれ各様の上小たのおうこ
假令狂気て御座すはこそかゝる願ひも致せぬ小小胸欲るも
詞わとまを思ひの録も小腹立也も道理もあ口号竹の面を
うめ玉房ののり本性るれ此城へいしと進しといふ子細ハ三浦家

の敵とある重忠の妻女たるやと云せし果に其美矣夫小料
かひ最早今てい御縁も切たお他人も其他人小猶油断
注日重忠の一言小親の心を知らまき源氏あし一味さる親
約束せ女房のい吾俣中猶さしといひ放たお詞をあら城
攻の軍の中へ去状きて玉房が乱気小夏もせ其方を此城へ
入らせ敵の要害に出入りとお大と見え目遠いせしう
油断あしといひ小其行の誤りあり返答あり去来問人を
問詰りて指おたお此場の言訳ありて色何角小付て疑ひ
のかる時節の御用心お氣のまはつともお道理あると下この所も
顧みどる外もあ上たるも只一筋に玉房まはの御名の取辱
を雪かんと前後をも弁へる出傍題名も大と呼なせ

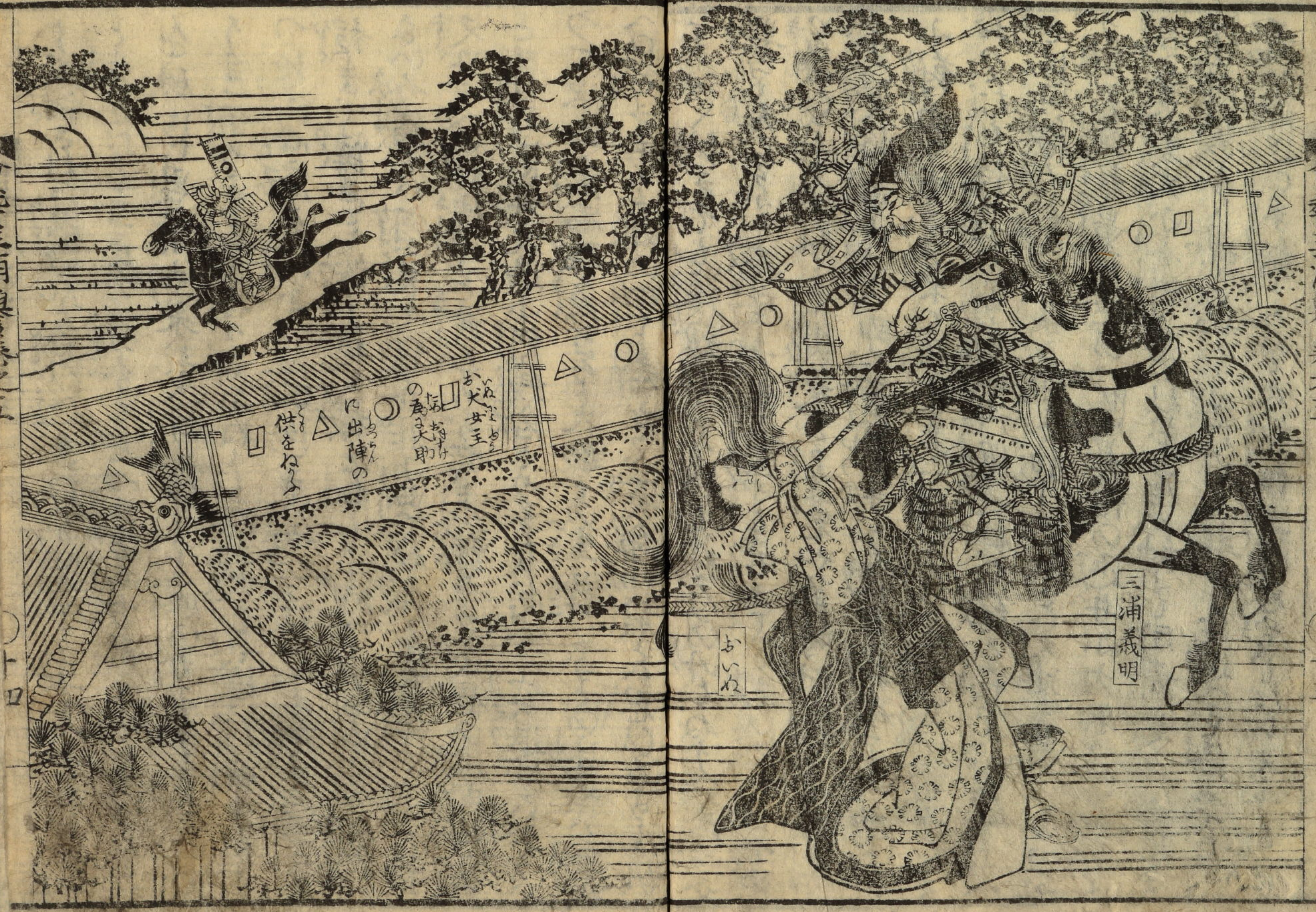
人下しるい畜生の皮と思召流さして兎角飲ひの一通り御同
少くあつたよと異竹の傍小寄膝をたぐつ胸のうら顔と
振らまて是非もあつて闕を小條後小馬を敷糸けと孫三
の馬離まき切たふ顔付小又よとと立戻り赤望の二人へ天
路居御座成を七重の膝八重梅御寮小つひ飛やまき這
方を頼めり答々とのまろく見え有明御寮あふよあまき
ぬ身のまげき思宜小額を摺つあつ口管祓りあそいあまき
在の女中も持條見え目無慙小思ととと紐あつらん
も討らまて何と料間の付方ともあつと云捨小一度小翼
へ入影や月夜小金の風情と暫らく息を次の間へ祈込の
品をうて見え思案工夫をうる小立の程もたじた軍のさ
矢吹ひの音鯨の色爰小管きて目やはら

○ 曠 小袖

借り三浦の大助美明、今と此世の首途を老の粧ひ若
後花田の衣の光澤を象上あひ白き直虫の袖も扱あつ結
ひとり故実を守ふ老功の心をふ小菴烏帽子まねも
照て輝けり金作正の太刀をた腰も真弓の百余歳の
たふ駒あけ二歳東雲足毛の青らく小五色を揃あふ
立榮勝色見とらふ紅梅手綱たらの手小うらうと轡を
扱き入秘密の鈴廣庭の破を蹴立て乗出と蹄の音小
一間の内を暫しとと色うけて駈出とお大が犬走りつと
づら小あつと廻つと慮外無礼火急の場所一箇の装ひ

中へん為と云も果ぬ小大助怒つて小賢も其の行勢ぬらひ六
 王房が夏も先達てもいふおとく汝の養育介抱つて尼法師
 とし改まをかきせ大助初め一門の後世菩提を吊をせといひ
 つふ小岡入しつた堅き地女を退けやつと一鞭のりまの踊を
 のらふ馬の力振て放しほしと懂へた系女の念カ男まきると駈
 おせとも引戻逆輪小巡まの諸ともふつてきて早疾の水くふ
 はくふくくまきくと接ふ接ふ髪形相根子并柳小枕
 鬢揚げあんとも飛ちるよて嵐ふりぬる大櫻見ふ目も苦地
 其風情大助もあくと果あくと欺くまきて六納得せぬ目
 色小猶も怒つとの色高く美明が討死の妨けると屋簷の奴
 爰なきんふといひも敢とある情は竹のむらも新

丁々討まても癢痺をこそけしむるひの叶をぬえんが者
 懸て死に系が本望去来吾命を召まよと思ひはたな女
 美心の系がくまぬこそ澁氣なるる鬼や角時刻移るうち寄
 手の大將畠山の次郎重忠退手を難く打破て大助との
 小對面きやと名乗て駈来ふ一騎うち美明馬をのりくと
 おつたち待設たふ畠山却退夫婦の縁を切て玉房をか
 きほし他人と成て某う命を助ん心應と大地を斬りよつふ
 ふとも此推量の遠ひいせ其情の返弁小大助が腹切也
 是うふお大介借きよと玉房が討も同前是を規模小
 以前のぶとく親と親とが結ひやく解を遠へと添つた人
 首の却退の手柄とるる六波羅表の忠義もたら又手を鹿



三浦義明

おいね

お大女王
の為子大郎

出陣の
供をねる

して討さるゝ助けんと思ひこまねた心應も立うへ小武士の娘
と生きたる玉房が身分も立つ三方四方圓くまると老のころ
を碎きし思案去来お大分錯せよと腰のか小手をかくし
うま苗めよと重忠が詞小ぬくぬお大う氣轉利腕小まう
つた御心應を向小つた取しき女の浅より玉房さゆ小ま
程まで憐れも深し祖父様と知りて御うまゆせう勿体
ない分錯と何支を理を非小曲てお命をな命て下さるか
又此うへの御情なくと涙をちりせよ未練ある大依の人間二人前
と長壽は此大助小何残念とめあなお大と突退す入る
つて次郎重忠性急ると大助との生過たふとの迷懐は天道
への悲せありと國の室と希かふ長命切腹と思ひもようい

早く此場を落延て重忠もいれど立せてある事と詞を
せよ尤程まで此老ゆきを奔走おかほど猶よの首う進せは
情小腹を切らせてあるま重忠とのとくと救さると吾へのま
懸るゝ此城を落てたぐ○祖父を殺して○助うて○討てよ
○各よと双方の争ひ果しなるわけに



此書物い格別珍物なり

高木與曾持



